

2024 年度海域アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学 拠点研究会・活動報告

講演会：「マレーシアにおける民族カテゴリーをめぐる思惑 ―なぜオラン・アスリは消滅しないのか」

信田 敏宏（国立民族学博物館）

日時：2024 年 11 月 15 日(金)17：00-19：00

会場：東京都立大学南大沢キャンパス 1 号館 103 教室

要旨：

マレーシアは、インドと中国という二大文明のはざまに位置し、太古より東西交易の要衝の地、いわゆる海のシルクロードの中継地として栄えてきた。当時からマレー半島には、多様な民族が行き交い、通り過ぎる者あり、来訪する者あり、そして定住する者もいた。混沌とした民族の往来は、大航海時代、植民地時代、日本による占領期を経てもなお、連綿と続き、現在に至っている。こうした人々の移動は、歴史の中に点在するものではなく、つながった線となって今に至っていると考えられる。

マレーシアといえば、「多民族国家」という枕詞がつきものであるが、本講演では、マレーシアにおける多民族共生について、ブミプトラ政策に焦点を当てて考察する。ブミプトラ政策とは、イギリスからの独立以降、1965 年のシンガポール分離独立と 1969 年の人種暴動を経て 1970 年代初頭に開始された新経済政策である。

本講演では、ブミプトラに属するマレー半島の先住民、オラン・アスリを取り上げる。ブミプトラとは、「土地の子」という意味で、ブミプトラのカテゴリーには、先住民族である「マレー人」や「オラン・アスリ」などの民族が属し、一定の優遇措置が施される。しかし、オラン・アスリはマレー人以外のブミプトラ（「他のブミプトラ」）と位置付けられ、マレー人と同等の待遇とは言い難い状況が続いている。こうした状況に対して、オラン・アスリとサバ州・サラワク州の先住民は連携し、自らを「オラン・アサル」と名乗り、先住性を主張し、先住民としての権利を求めている、というのが今日の状況である。

本講演では、ブミプトラと非ブミプトラの間の分断や、ブミプトラ内部の民族の分断や階層性、そしてオラン・アスリ内の民族の流動性や動態性を示しながら、多民族国家のな

かで、時代・社会・政治に翻弄されながらも、それぞれの民族に見え隠れする思惑を紐解くとともに、人口が極めて少ないオラン・アスリがいまだ消滅せず存在し続ける要因について考察する。

2024 年度海域アジア・オセアニア研究プロジェクト全体会議「食・モノ・環境」

日時：2025 年 2 月 1 日(土)13:30～18:30、2 月 2 日(日) 10:00～12:00

会場：東京都立大学南大沢キャンパス 6 号館 101 教室

使用言語：日本語（部分的に英語）

開催形式：対面およびオンラインのハイブリッド形式

タイムテーブル：

2 月 1 日(土) 個人発表（「食・モノ・環境」）

13:30 開幕挨拶：小野林太郎（国立民族学博物館・教授）

13:40 野林厚志（国立民族学博物館・教授）

「救荒植物食文化——ヒトの環境適応戦略」

14:10 師田史子（京都大学大学院・助教）

「モノ化する鶏、鶏を食して弔う人間：フィリピンの闘鶏にみる人間－鶏の両義的関係」

14:40 明星つきこ（日本学術振興会特別研究員／東洋大学）

「船大工道具からみる南スラウェシの森と海」

15:10 ピーター・マシウス（国立民族学博物館・名誉教授）

“Food from the Bowels of the Earth: Taro, Fish and other Ingredients in Bangladesh” 「大地の恵み：バングラデシュのタロ、魚、その他の食材」

15:40 休憩

16:00 竹川大介（北九州市立大学文学部・教授）

「海に沈む村々ー海浜に居住するソロモン諸島海洋民ラウへの地球温暖化によるこの 20 年間の変化」【オンライン発表】

16:30 小林 誠（東京経済大学・准教授）

「ココヤシを植えたあとで——フィジー・キオア島における土地の所有と利用」

17:00 飯田晶子（東京大学大学院・特任講師）

「パラオにおける食と景観：グローバル化とローカル化の交差」

17:30 大西秀之（同志社女子大学・教授）

「土地にまつわる記憶：奄美群島の儀礼をめぐる景観史」【オンライン発表】

2月2日(日)

ラウンドテーブル

司会：河合洋尚（東京都立大学）

10:00～12:00 「いま海域アジア・オセアニア研究をいかに捉えるか？」

パネリスト： 河合洋尚（東京都立大学）、小野林太郎（国立民族学博物館）、古澤拓郎（京都大学）、長津一史（東洋大学／ウェブ参加）

＊ パネリストから1時間ほどの問題提起をした後、続く1時間は全体で議論を行った